



日本遺産「里沼 SATO-NUMA」について

～館林の沼辺文化をまちづくりへ生かす～

<はじめに> 日本遺産について

- 1 「里沼」とは ※新しい概念
- 2 館林の地形と沼 ―館林にはなぜ沼がたくさんあるのか?―
- 3 <日本遺産認定>里沼(SATO-NUMA)―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―
①茂林寺沼「祈りの沼」②多々良沼「実りの沼」③城沼「守りの沼」

<はじめに>日本遺産について

◆「日本遺産」とは

平成27年度に文化庁が創設した事業で、地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化や伝統を語るストーリーを、「日本遺産」として認定するもの(2020年までに100件を認定)。※地域型(単独自治体)・シリアル型(複数自治体)があり

- 従来の文化財行政→個々の歴史的遺産を点として指定することで保存してきた
- 日本遺産 →点在する各遺産をストーリーとして繋ぎ、面的活用・魅力発信する



◆日本遺産認定状況

年度	申請	認定	採択率	関東地方の認定状況
平成27	79件	17件	21.5%	足利市・水戸市等(シリアル型)・桐生市等(シリアル型)
平成28	67件	19件	28.4%	佐倉市等(シリアル型)
平成29	83件	18件	21.7%	行田市(地域型)
平成30	76件	13件	17.1%	宇都宮市(地域型)、那須町等(シリアル型)
令和元	72件	16件	22.2%	館林市(地域型)
令和2	?	残り17件		

1 「里沼」とは ※新しい概念

【1】「館林の歴史文化の魅力」は何か？

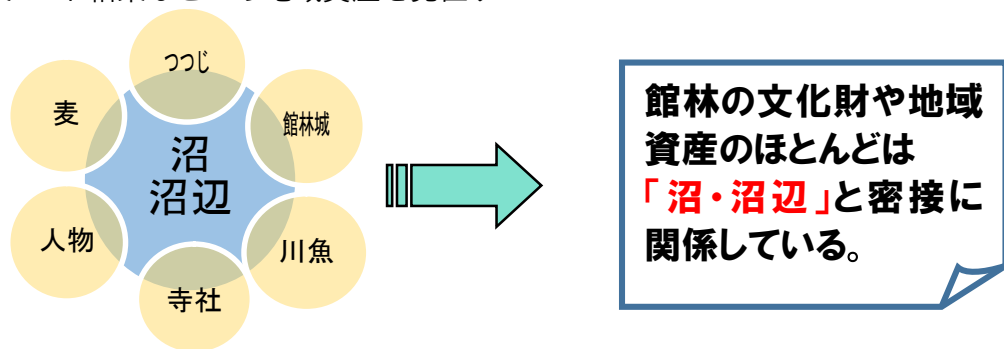
各団体及びイベント参加者へ実施したアンケートによる分析（文化振興課調べ）

対 象／順 位	①	②	③
文化財ボラ(H30.4.28)	つつじ	寺・神社	沼・沼辺
観光ボラ(H30.5.2)	つつじ	館林城	沼・沼辺
武蔵館つつじまつり(H30.5.3・4)	つつじ	沼・沼辺	ゆかりの人物
つつじガイドボラ(H30.5.10)	つつじ	沼・沼辺	歴代城主
市民の会講座(H30.8.30)	沼・沼辺	つつじ	歴代城主

※「沼辺」＝沼とその周りで育まれた歴史文化

【2】「日本遺産プロジェクト」による「館林の魅力」の掘りおこし

アンケート結果などから地域資産を見直す



◆しかし、沼は全国どこにでもある→館林の沼の特色は何か？

【3】「里沼」という新しい概念を見出す ※「館林市歴史文化基本構想」

既存の概念

「里山」「里地里山」「里海」

- 現在、人と自然の共生する社会の姿として「里山」という概念が国内で浸透している。
- 里山は生活に欠かせない木材などの供給源となる一方で、人が手を加えることで自然環境が保たれているという概念から、近年では、広く自然環境に当てはめて多様な生態系を保全することを目的に、環境省で「里地里山」「里海」という用語を用いている。

※環境保全の考えが中心

新しい概念

「里沼」

【館林の沼】

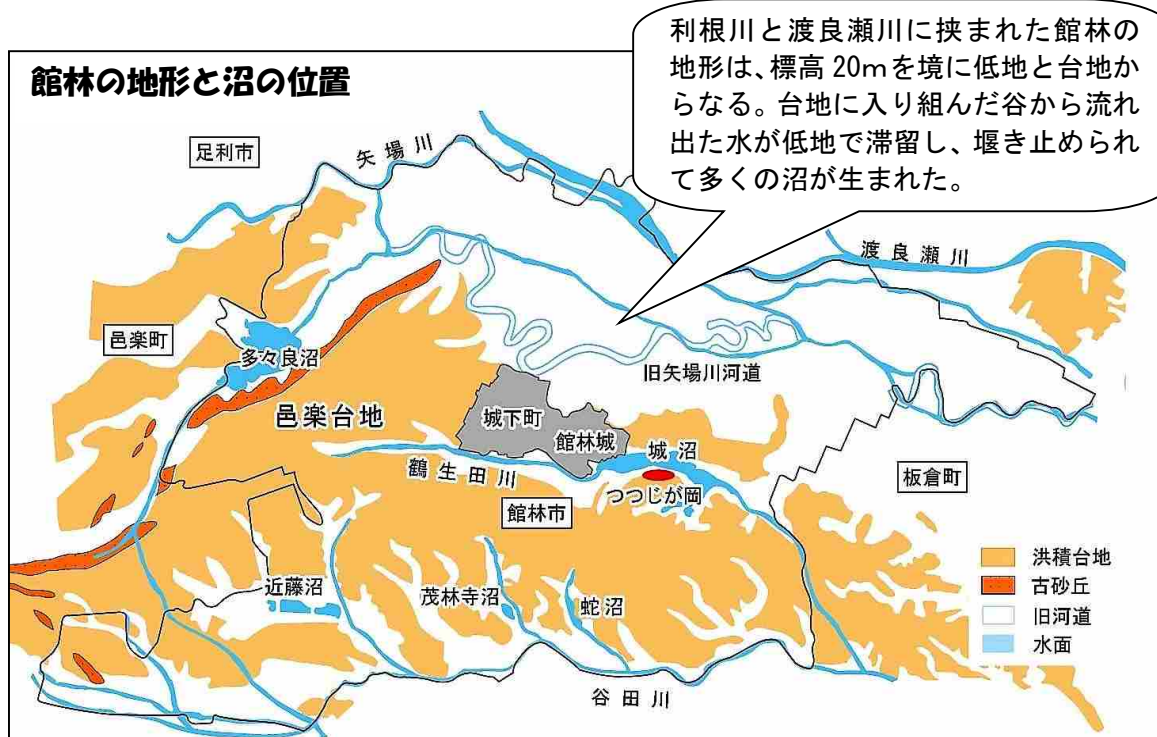
- ①人里近くにあり、暮らしや生業に関わっている。歴史文化を証明するものが残っている。
 - ②沼特有の多様な動植物が生息している。
 - ③沼の生態系ネットワークとしてハクチョウなど渡り鳥の中継地となっている。
- ※これまで環境問題に官民一体で取り組んできている。

★里山（さとやま）

集落や人里に隣接した結果、人間の影響を受けた生態系が存在する山のこと。深山（みやま）の対義語。1759年の尾張藩の「木曾御材木方」の文書に「村里家居近き山をさして里山と申候」とある。高度経済成長期以降の里山の自然破壊が問題視された平成7年（1995）頃から全国的に普及した。

2 館林の地形と沼 ―館林の沼はなぜ残ったのか？―

- ① 沼 (marsh・swamp)・・・天然にできたもので、湖よりも浅く深さ1～5m くらいで、水草が繁茂するところ。※湖 (lake) は湖沼のうち比較的大きなもので、水深 5～10m より深いものを指す。池 (pond) は沼とほぼ同じ意味を持つが、人工的に作られたものを多く指す (貯水池や庭園の池など)。
- ② 日本にある沼の数 (現存する沼)
 おおよそ 100 くらい存在する。関東平野には約 30 あり、そのうち5つ (城沼・多々良沼・近藤沼・茂林寺沼・蛇沼) が館林市にある。



<万葉集や古代の文献に記録された沼> (『館林市史資料編 1』より)

■万葉集 (奈良時代末期) に詠われた沼

- 上毛野 伊奈良の沼の大蘭草 よそに見しよは今こそ勝れ
- 上毛野 可保夜が沼のいはみつら 引かばぬれつつ吾をな絶えそね
- 上毛野 伊香保の沼に植系子水葱 かく恋ひむとや種求めけむ
- 埼玉の 小埼の沼に鴨そ翼きる 己が尾に降り置ける霜を掃ふとにあらし
- 行方無み 隠れる小沼の下思に われそもの思ふこのころの間

■『常陸風土記』 (奈良時代初期) に記録された沼

- 其の杜の南に郡家あり。北に沼尾の池あり。古よりへらく、神世に天より流れ来し水沼なり。生へる蓮根は、味気太だに異にして、甘きこと他所を絶したり
- 東の松山の中に一つの大きな沼あり。寒田と謂う。四、五里ばかりなり。鯉・鮒住めり。之万・軽野の二里に有らゆる田、少しく潤へり。

かつては全国の低地にたくさんあった沼 → 歴史の流れのなかで消滅・縮小

＜平野（低地）の沼の消滅・縮小の理由＞

- ①植物の繁茂による湿原化→乾燥による草原化
- ②人の手による干拓
 - 江戸時代の新田開発…幕府や藩による耕作地の拡大
 - 近代以降の都市化（工場用地や宅地化）

「元禄上野国絵図」（江戸時代中期作成：群馬県立文書館所蔵）に書かれた邑楽郡内の沼



※大輪沼
江戸中期の新田開発により消滅

※板倉沼
昭和 51～55 年の土地改良により消滅

『館林市史』特別編第2巻より

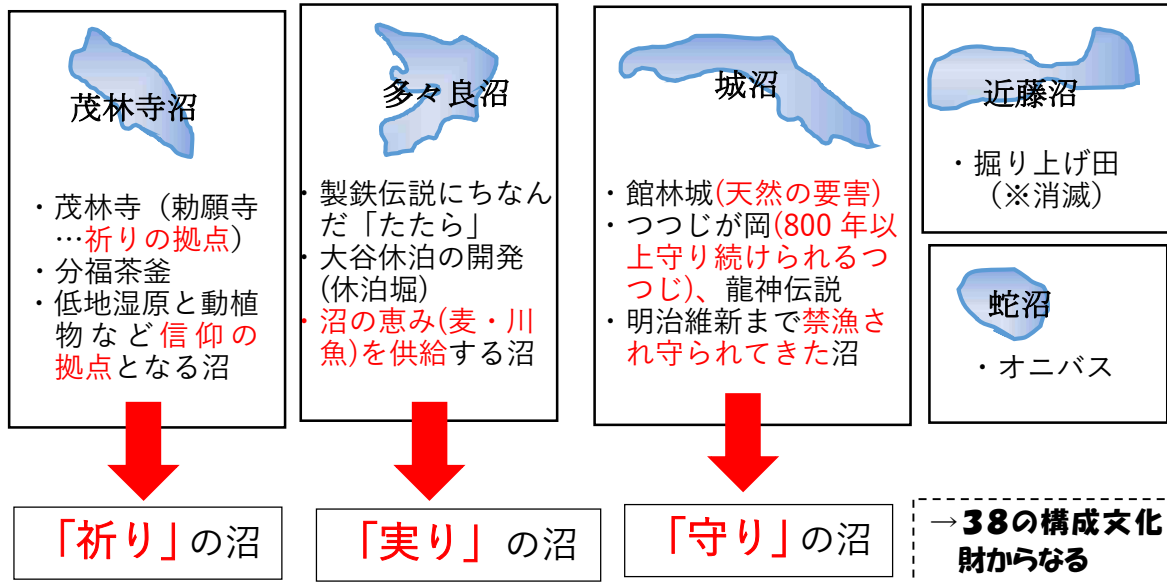
館林の沼が残った理由

- ①江戸時代、河川付け替えによる治水対策によって新しい耕地が確保できた
 - ※寛文5年（1665）矢場川の流路の付け替えで旧流路だった低地に新田が誕生
 - 沼を埋め立てる必要がなかった
- ②個々の沼が人とのかわりのなかで特色を持ち、人が沼を必要としていた。
 - 信仰の場「祈りの沼」
 - 生産の場・自然の恵み「実りの沼」
 - 要害と伝説の場「守りの沼」

『館林領地方諸用集』（徳川綱吉時代）に記録された沼（『館林市史』資料編3より）

一館林領沼立横反歩	御城沼	長三丁 横五丁 深壹丈	反歩百八十町
近藤沼	長四丁 横三丁 深九尺	東沼	六町
大輪沼	長十四丁 横八丁 深四尺	日向村	内三丁 横四丁 深四尺
多々良沼	長三十四丁 横四丁 深四尺	多々良沼	長三十四丁 横四丁 深四尺
羽付沼	長三丁 横五丁 深四尺	三町三反三畝十分	粗合村
西正寺沼	長三丁 横五丁 深七尺	六町式反四畝分	粗合村
板倉沼	長十式丁 横八丁 深四尺	式間百式十町分	板倉村
海老瀬沼	長壹丁 横八丁 深四尺	九反式畝分	板倉村
妙善寺沼	長五十間 横十四間 深壹丈	式反三畝十分	板倉村
同村	長壹丁 横五丁 深壹丈	三町三反三畝十分	板倉村

3 <日本遺産認定> 里沼 (SATO-NUMA) —「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化—



“祈りの沼”=茂林寺沼



史実 神聖な存在から自然と人間が共存した沼

①1426 年開山の茂林寺(曹洞宗)	⇒	地元の人々の心の拠り処
②1522 年 後柏原天皇綸旨	⇒	天皇の勅願寺(祈りの拠点)
③茂林寺本堂・山門への葦利用	⇒	入会地と自然環境維持
④「分福茶釜」と参拝客	⇒	来訪者の祈りの場

構成文化財

■茂林寺沼及び低地湿原 ■茂林寺(分福茶釜) ■堀工町のどんと焼き など

“実りの沼”=多々良沼



史実 地元の人々に生業・産業をもたらした沼

①中世期大谷休泊の用水堀開削 江戸中期「館林領五郡農家水配鑑」	⇒	二毛作(米・麦作)地帯
②1772 年 「日向村村定誓約書」	⇒	漁業組合による共同漁撈
③1855 年 封内経界図誌「日向村」	⇒	漁船と蓮根掘りの記録
④麦作が産んだ近代産業・名産品	⇒	日清製粉とうどん・麦落雁

構成文化財

■大谷休泊の墓 ■封内経界図誌 ■沼の漁具と日向舟 など

“守りの沼”=城沼



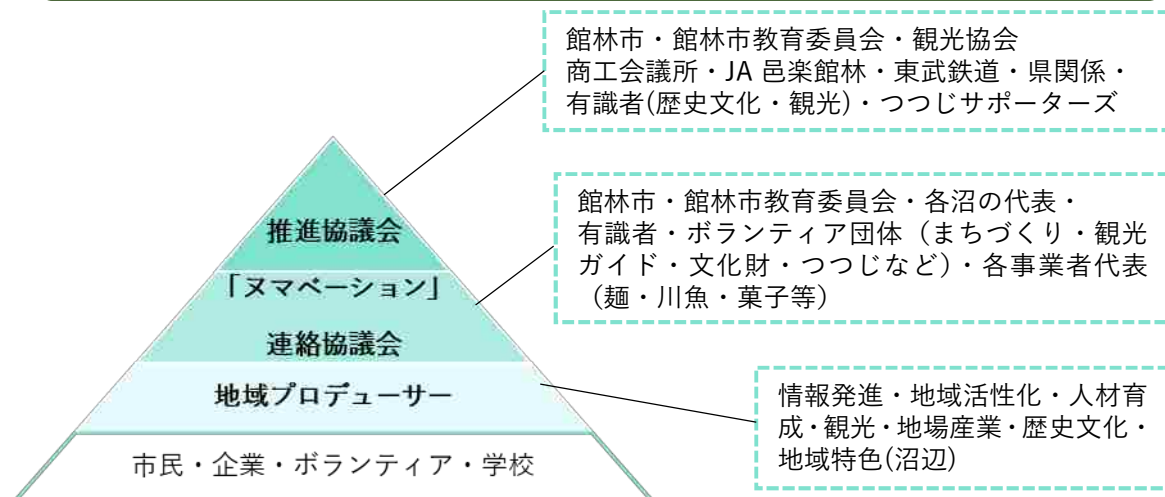
史実 館林城の要害と城下町を形成した沼

①1471 年 「松陰私語」の館林城	⇒	沼を“天然の要害”に利用
②1661-72 年「館林領地方諸用集」	⇒	城の一部としての「御城沼」
③歴代城主・近代のつつじ古木保護	⇒	樹齢 800 年を守り続ける
④1846 年 国替引継書(禁漁)	⇒	解禁・墾田・渡船と産業

構成文化財

■館林城跡 ■尾曳稻荷神社 ■躑躅ヶ岡 ■竜の井・青龍の井戸 など

日本遺産認定後の推進体制(館林市) ※認定からスタート



地域活性化のキーワード



- ①沼に関わる人・組織のネットワーク構築
- ②農漁業と新しい観光・産業の融合
- ③シビックプライド醸成によるまちづくり

「日本遺産」認定後に各分野で進める事業(予定)

①歴史文化の継承

構成文化財をきちんと保存・活用する

1-1) 文化財保護・活用体制整備の推進	1-4) 拠点施設と「里沼」ワークショップ充実
1-2) 「たてばやし里沼ブランド」創設検討	1-5) 日本遺産案内看板・サイン整備
1-3) 活用事業「文化財ルネサンス」推進	1-6) 市民協働によるつつじ保全

②人材育成・住民参加

地域活性化を支える人や活動を育てる

2-1) 市民活動参加者・賛同企業増加	2-4) 総合学習・出前講座による地域魅力再発見
2-2) ヌマベーション連絡協議会設置	2-5) 「日本遺産」提案事業コンペ実施
2-3) 里沼ランドナビゲーター育成	

③産業振興

地域の基盤となる産業を盛り上げる

3-1) 統一デザイン設置による PR	3-4) インターンシップ受入れと次世代育成
3-2) 商品開発における企業連携促進	3-5) 体験ツアー及び工場見学ツアー実施
3-3) 地元高校・大学との官学連携事業	

④観光振興

来訪者の満足度を高めるコンテンツを揃える

4-1) マーケティング戦略	4-5) ガイダンスセンター活用
4-2) つつじが岡公園の四季型利用促進	4-6) 関連見学施設との連携・回遊性向上
4-3) ぐんま DC 相乗効果	4-7) 鉄道・バスを利用したツアー企画
4-4) 麦食文化・川魚食文化 PR	4-8) 田山花袋の「沼辺の行楽」再現ツアー

⑤情報発信

館林市「里沼」の魅力を世界に発信する

5-1) 「日本遺産」Web サイト開設	5-5) 「日本遺産」連携シンポジウム等開催
5-2) VR 映像制作・アクセス環境整備	5-6) ゆるキャラ・ご当地アイドル PR 活動
5-3) ガイドブック・パンフレット作成	5-7) 「日本遺産」写真公募展や絵画コンクール
5-4) 「日本遺産」ロゴ・本市独自ロゴ作成	

① 申請者	館林市	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
(ふりがな)	さとぬま —いのり・みのり・まもりのぬまがみがきあげた たてばやしの ぬまべぶんか—		
里沼(SATO-NUMA) —「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化—			
④ ストーリーの概要 (200字程度)			
関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と出会うことができる。館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO-NUMA)」であった。館林の里沼は、沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の原風景と信仰が共存する茂林寺沼は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多々良沼は「実りの沼」、館林城とつつじの名勝地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言い換えることができる。館林の里沼を辿れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができる。			
 茂林寺沼及び低地湿原  多々良沼越しに望む富士山  城沼とつつじの名勝地「躑躅ヶ岡」  創業期日清製粉館林工場事務所  旧秋元別邸  鯉の天ぷら・うどん			
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	館林市役所 日本遺産プロジェクト(館林市教育委員会 文化振興課) 主幹 岡屋紀子, 主任 吉村昭和, 主事 岩瀬宇		
電 話	0276-71-4111	FAX	0276-74-4113
E-mail	nihonisan@city.tatebayashi.gunma.jp nihonisan@city.tatebayashi.lg.jp		
住 所	〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号		
※昨年度申請実績			
平成30年度申請タイトル			
変更内容			

ストーリー

里沼(SATO-NUMA) —「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化—

【里沼】沼は、古代・万葉の頃には「隠沼」と詠われ、水辺の草木に囲まれてひっそりとした佇まいを持ち、人を寄せつけない神聖な場であった。いつしか、人々が沼に近づき集う中で、暮らしと結びつき、沼と共生した生業や文化が生まれ、沼は「里沼」となった。

里沼は、自然と暮らしが調和した生活文化を今に伝える、我が国の貴重な財産である。新田開発や近代化の波にもまれ、各地から沼が消え去りつつある今、館林では、時を重ねながら、それぞれの特性を磨いてきた、希少な里沼を見ることができる。

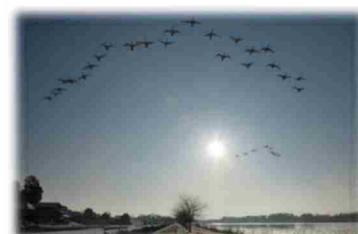


館林の地形と沼

①里沼(SATO-NUMA)

❖館林では、冬の朝夕に白鳥たちが沼から沼へと雁行する光景を目にすることができる。大小の河川が網目のように広がる関東平野には、かつて多くの沼が存在したが、近世以降のさまざまな開発によってほとんどが姿を消し、耕地や工場用地、宅地などに変わった。しかし、館林には茂林寺沼・多々良沼・城沼をはじめ、近藤沼・蛇沼など今も大小の沼が存在し、沼辺を行き交う水鳥たちの良い棲みかとなっている。

❖利根川と渡良瀬川に挟まれた館林の地形は、標高20mを境に低地と台地からなる。台地に入り組んだ谷から自然に湧き出た水は低地で滞留し、堰き止められて多くの沼が生まれた。その沼の畔に人の手が加わることで、館林の「里沼」の歴史が始まった。



白鳥の雁行風景(城沼)



茂林寺の山門



茂林寺に伝わる茶釜



多々良沼と松林



大谷休泊の墓

②「祈りの沼」～里沼の原風景を残す茂林寺沼～



❖かつて、河川や沼の水辺には湿地や湿原が広がり、その周りには平地林が見られた。沼や湿原には、鯉や鮒、トンボなどの水生動物や昆虫、菱や藻などの水草や湿原の植物が生息し、沼辺の平地林は狸や蛇、野鳥などの棲みかとなっていた。このような水を取りまく自然環境は、平野の都市部では開発によってほとんど見られなくなっている。しかし、周辺が宅地化された今も、茂林寺沼にはその原風景が残されている。沼辺にはコウホネ、カキツバタ、ノウルシなど希少種の植物が自生し、関東地方でも数少ない貴重な低地湿原となっている。

❖茂林寺沼には、なぜ今も原風景が残っているのか？そこには、600年前に開山した古刹・茂林寺の存在がある。沼の畔に曹洞宗の信仰の拠点「祈りの場」が生まれることにより、人々の自然を畏怖する気持ちが高まり、「祈りの沼」としての静謐さが受け継がれてきた。いつしか人々は、その沼を茂林寺沼と呼ぶようになった。そして、寺に伝わる貉(狸)の古譚「ぶんぶく茶釜」のなかで、和尚が貉の化身であったり、狸が茶釜に化けるなど、人と動物とのかかわりが今もユーモラスに語り継がれている。

❖茅葺き屋根の本堂や山門をもつ茂林寺は、その葺き替えに沼茅(葦)を利用してきた。人々は繁茂する葦を刈ることで沼の生態系を維持し、茂林寺沼は「里沼」として人との共生が保たれてきた。今も人々の祈りの姿が途絶えることのない寺と、希少な動植物の棲みかの沼との共存が図られている。

③「実りの沼」～“麦都”館林を支えた多々良沼～



❖多々良沼とその沼辺に細長く連なる松林。そこには「たたら」の地名の由来となった古い時代の製鉄の痕跡と、500年前の開拓者大谷休泊による植林と用水堀開削の歴史が刻まれている。多々良沼は、人々の暮らしを支え

る生業の場としての「里沼」へと拓かれてきた。

- ◆沼からの用水によって潤された田畑は、米と麦との二毛作が可能となり、江戸時代には館林藩から将軍家へ小麦粉が献上されたように、館林は麦の産地となった。明治期になると麦を生かした近代製粉業や醸造業が興り、「麦都」となった館林では、麦を原料とした麦落雁やうどん、醤油が名産品となった。「里沼」による水と大地の恵みは、多々良沼を「実りの沼」へと進化させ、現代の館林の食品産業の興隆へと結実している。
- ◆「実りの沼」は漁労の場としても人々の暮らしを支え、鯰の天ぷらや鯉の洗い、鮎の甘露煮など沼の幸を活かした個性ある食文化をもたらした。長年培われてきた様々な味わいは、里人たちの貴重なたんぱく源となり、もてなしや晴れの日の料理として今も暮らしに根付いている。

④「守りの沼」～城と躑躅ヶ崎を守ってきた城沼～

- ◆550年前、周囲5kmの東西に細長い城沼を天然の要害として館林城が築かれた。城沼は館林城の建つ台地を取り囲む外堀の役目をし、武将たちにとって「守りの沼」となった。沼によって守られた堅固な城は、近世になると江戸を守護する要衝として、徳川四天王の榊原康政や、五代将軍となる徳川綱吉の城となり、守りを固めるための城下町を広げ、その周囲に水を引き入れ、堀と土塁で囲った。
- ◆「守りの沼」には、二つの伝説が生まれた。一つは龍神伝説である。沼に人を寄せつけないため、城沼は沼の主・龍神の棲む場となり、城下町にはその伝説を伝える井戸が残る。もう一つはつつじ伝説である。今から400年程前、「お辻」という名の女が龍神に見初められ、城沼に入水した。それを悲しんだ里人は沼が見える高台につつじを植え、その地を「躑躅ヶ崎」と呼んだ。歴代の館林城主はそこにつつじを植え続け、花が咲き誇るようになった高台を築山に、城沼を池に見立てた雄大な回遊式の大庭園を造り上げた。城主によって守られてきた躑躅ヶ崎は「花山」とも呼ばれ、花の季節には里人たちにも開放された。
- ◆明治維新後の近代化は、「守りの沼」を大きく変貌させた。江戸時代に禁漁区となって人を寄せつかなかった城沼は、里人たちに開放されて漁労や墾田、渡船などが営まれ、「里沼」としての歴史を歩み始めた。

⑤「もてなしの心」へと磨き上げられた館林の沼辺文化

- ◆近代化による「守りの沼」の変貌は、城沼と景観を一つにしていた「躑躅ヶ崎」も大きく変えた。それまで城主によって守られていた「躑躅ヶ崎」は、町人や村人たちの努力によって、公園「つつじが岡」として行楽地に生まれ変わり、400年前に植えられたつつじは貴重な古木群となり、名勝として甦った。多くの人々が訪れるようになった沼辺には、行楽客を迎えるための文化が集約され、「もてなしの心」が芽生えた。
- ◆近代化によって城下町で成長した製粉・醤油醸造・織物などの会社は、内外の客を迎えるもてなしの場として「つつじが岡」を利用した。東武鉄道の開通と館林出身の文豪田山花袋が記した旅の案内書は、沼辺にある「つつじが岡」と茂林寺へと多くの人々を誘った。さらに「実りの沼」がもたらした名産品の麦落雁やうどんは、手軽な館林土産として広く知られるようになり、里沼の特性を活かした「もてなしの心」が根付いた。
- ◆館林の沼辺に佇むと、赤城山や日光連山、遠くは筑波山・富士山を眺望できる。「祈りの沼」「実りの沼」「守りの沼」、それぞれ特性を持って、多彩な文化を生み出してきた館林の「里沼(SATO-NUMA)」。その特性は明治の近代化以降、「もてなしの心」へと磨き上げられ、館林の沼辺文化として今も受け継がれている。



沼の幸・川魚料理



館林城三の丸土橋門



つつじ古木群



龍神伝説の竜の井



渡し舟が起源 花ハスクルーズ



正田醤油正田記念館



旧館林二業見番組合事務所



田山花袋旧居

郷土愛を育む小中学校の取り組みについて

学校教育課

1 道徳科において

(1) 道徳科の学習の基本となる「内容項目」に「郷土愛」が位置付けられている。

C 主として集団や社会との関わりに関すること		
内 容 項 目		
伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度	小1、2年	我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつこと
	小3、4年	我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、国や郷土を愛する心をもつこと
	小5、6年	我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと
	中学校	郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること
		優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めること

(2) 実際の教科書における教材一覧

小学校・学年	教材名（日本文教出版）	内容項目
1 学年	はしれ、さんりくてつどう	郷土愛
	うつくしい わがし	伝統と文化の尊重
2 学年	ぎおんまつり	伝統と文化の尊重
	花火にこめられたねがい	郷土愛
3 学年	「おもてなし」ってなあに	愛国心
	ふろしき	伝統と文化の尊重
4 学年	お父さんのじまん	伝統と文化の尊重
	浮世絵	伝統と文化の尊重
5 学年	和太鼓調べ	伝統と文化の尊重
	美しい夢 ゆめぴりか	郷土愛
6 学年	ぼくのお茶体験	伝統と文化の尊重
	天下の名城をよみがえらせる 姫路城	郷土愛
中学校・学年	教材名（東京書籍）	内容項目
1 学年	ぼくのふるさと	郷土愛
	郷土を彫る	伝統と文化の尊重
2 学年	祭りの夜	伝統と文化の尊重
	祭りの夜	郷土愛
3 学年	花火と灯ろうと流し	愛国心
	島唄の心を伝えたい	伝統と文化の尊重

(3) 「郷土愛」が直接のねらいではないが、「沼辺文化」に関連が深い内容項目例

中学校 2 学年	教材名（東京書籍）	内容項目
	冬の使者「マガン」	自然愛護・共生
関連性	ラムサール条約登録湿地地区の中学生が、観光客が増えたことによるゴミ問題に葛藤する資料である。本題材のねらいは、「自然と人間のかかわりについて考え、かけがえのない自然を愛護し、その保全に努めようとする態度を育てる。」である。日本遺産に認定された里沼を本題材と関係づけて紹介することで地域の自然との共生を考える機会になる。	

2 社会科において

(1) 学習指導要領上の位置付け（現行指導要領）

小学校 3 学年及び 第 4 学年の目標	(2) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、 地域社会に対する誇りと愛情を育てる ようにする。
	これは、自分たちの住んでいる身近な地域や市（区、町、村）や県（都、道、府）の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、 地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにすることをねらい としており、…（「指導要領解説 社会編」p.19）

(2) 上記の学習内容

内容(1)	自分たちの住んでいる身近な地域や市（区、町、村）について、 次のこと※ を観察、調査したり白地図にまとめたりして調べ、地域の様子は場所によって違いがあることをかんがえるようにする。
	※次のこと…以下の(2)に示す内容のこと。
内容(2)	身近な地域や市（区、町、村）の特色ある地形、土地利用の様子、主な公共施設などの場所と働き、交通の様子、古くから残る建造物など

(3) 「のびゆく館林」（三訂版）の内容

小学校・3 学年	小 単 元	目 標
1 わたしたちの館林 （2 5 時間扱い）	1. 学校のまわりをたんけんしよう（1 0 時間）	学校の周りの様子に関心をもち、地形や土地利用、目立つ建物、交通の様子などについて、観察したり絵地図に表したりして調べ、学校の周りの様子は場所によって違いがあることを考えることができる。
	2. 館林市をしらべよう（1 5 時間）	市内の地形や土地利用の様子、主な公共施設、古くから残る建造物、交通の様子などについて、航空写真や地図を活用して調べ、市の様子は場所によって違いがあることを考えることができる。

(4) 市内めぐりのポイント等（「のびゆく館林」からP.8）

「自然」	多々良沼、渡良瀬川、谷田川、 城沼、茂林寺湿原 、高根保安林
「住宅・商店」	市中心部、リバーサイド大島、アピタ周辺
「田畑」	大島地区、渡瀬地区、三林地区→田 五小地区→畑、ビニルハウス
「工場」	各工場団地
「公共施設」	芸術ホール、児童センター、公民館、消防署、警察署、館林美術館、彫刻のこみち など
「古くからの建造物」	旧秋元家別邸、尾曳神社、旧上毛モスリン事務所【第 2 資料館】、つつじが岡公園、鷹匠町武家屋敷、茂林寺、旧二業見番、毛塚記念館、長良神社、富士嶽神社、本丸跡、田山花袋旧居など